

総合的な学習の「表現活動」に関する実践的研究 —神島小学校の事例から—

中 西 智 子*

小学校という教育機関での創造的な表現活動が地域の人たちに「学校の日常的行為」の一つとして認められ、地域でもにわかにはやり出した新しい活動は、ある種の状況の中から生まれた。本稿では、小学校が生活科と総合的な学習における学習指導の創造的な試みとして取り組んだ学校文化の在り様と、学校と地域の連携によって生れた教育活動の事例を紹介することからその教育的意義の検討をし、地域の人たちが教育現場から獲得した文化活動の広がりやの基盤について考察する。

キーワード: 総合的な学習、生活科、表現活動、音楽表現、教育支援、学校と地域の連携

はじめに

小学校での「生活科」「総合的な学習」は、平成14年度からの正式導入を前に平成12年度からの移項措置で、教育内容の検討と試行が進み、事例研究の紹介が盛んになった。従来、学校設置者(教育委員会)だけに認められていた「学校設定科目」が各学校ごとに独自に科目や教科を設けることが可能になった。これを受けて、「生活科」「総合的な学習」では学校側が計画・立案して、教科を横断的に〈学び〉への積極的な動機づけや、社会とのかかわりへの動機づけを重視する教育内容の実践へと進められている。

学際的なテーマの授業では担当する教師の工夫によって、児童に対応した多様な教育内容で児童の実態、地域性などに応じた独自の教育内容が生まれた。そして「子どもが主役」という新しい授業形態が始まり、教科書からの授業とは別の新たな学びの可能性を持たらした。例えば学年を超えた教師の協力体制の場合では複数の教師によって児童を見つめ、一人の教師では気づかない児童一人ひとりの個性を引き出すことにも効果が期待できる。さらに『教科ごとの学問知の教育』とは異なる側面から、児童の生活に基盤を置いたクラス独自の、あるいは学校独自の取り組みを積

極的に教育実践できるという利点によって『広範な学問知の教育』が可能になった。

このような新たな試みには、人が生涯発達するうえでの生涯学習へと目標を持ちうるカリキュラムを組み、継続的に続ける価値に基いた授業計画が求められることになる。それは、教師個々に長期的な視点で教育を計画することが求められているといえる。一過性のイベント的なカリキュラムではなく、学校・家庭・地域のグローバルな観点が基盤となろう。一方で、現職教師が教師となるまでに受けた教員養成課程での教育内容と2002年度から始まる教育内容との間に、〈理想と現実との乖離〉が生じてくるのではないだろうか。教育の方向性は一般的に各教師に任されている故に、教師はこのような問題意識を抱えることになる場合がある。この点については情報化社会の今日、教師を中心にしたカリキュラムの構築にインターネット等の利用により教師間のネットワークの充実を期待するところである。それ故に教師の努力の結集で采配が進む時、大学という教育機関から教育現場への情報提供(支援)も必要と考える。

本稿では、教育現場からの要請に応じて筆者が関わった鳥羽市立神島小学校が“表現活動”に取り組んだ過程を検証することから、今日的な総合教育の問題を考察する。

* 三重大学教育学部幼児教育

I 総合教育としての表現活動

本稿で紹介する神島小学校の全校児童数は1年生から6年生までに兄弟姉妹が含まれて、平成12年度は17家族の28名、13年度は16家族の25名、教職員11名である。鳥羽市から定期船で50分であるが、便数が少ない為に教師は教員住宅に住む。

神島は周囲4キロ、人口560人、212軒の集落が風を避けて北側斜面にある。教育施設の保育園は集落に位置するが、小学校、中学校の校舎は風は強いが太陽を受けて南斜面に建つ。高等学校は親元を離れて下宿をするか、片道所要時間50分の定期船で通うことになる。コンビニエンスストアも信号も無く、交番も無い。島民が親戚関係のような親密な地域では、下校してからの児童は迷路のような坂道で同年齢集団や異年齢集団が賑やかに遊んでいる。平地では仕事で行き交う人たちに紛れて遊んでいる。塾やお稽古事が無縁の地ではテレビやテレビゲームで遊ぶが、児童の遊び集団は衰弱していない。通常幼児も含めて、子どもが遊ぶ姿は島民の視野に入りやすく、怪我などのアクシデントには遊び仲間や周辺住民の対応等で迅速な処置ができています。

従来から神島では、保育園や小学校、中学校の表現意欲を凝縮した教育成果は文化祭、運動会などの学校行事において発表され、地域の行事と一体化する如くに住民に受け入れられてきた。学校側としては大人たちへ学校でどのようなことを学んでいるかを知ってもらふ絶好の機会であり、子どもたちへは保育園から小学校そして中学校へと縦の関係で過去・現在・未来の学習内容の期待を育み、懐かしむ機会と捉えている。

平成12年度から、全校生徒1年生から6年生の28名で‘総合教育’という枠で表現活動に取り組むことになった。この年に具体的な知恵を求められた筆者が助言者として神島小学校へ関わることになり、まず以下のような提案をした。

- ① 神島小学校の独自性を中心にした表現活動をめざす。
- ② 島内に限らず、島以外のどこで発表して

も自慢できるまでの完成度をめざす。

- ③ 保護者が納得して応援してくれる気持ちになる活動をめざす。
- ④ 島民が喜んでくれる活動をめざす。
- ⑤ 必要に応じて、筆者以外の協力者に参加してもらう。

学校としては“和太鼓”を取り入れた活動に惹かれており、和太鼓を総合教育にどのように取り入れるかという話し合いでは以下の提案をした。

- i 最初から神島小学校の児童に島外の〇〇太鼓の曲を練習させない。
- ii 太鼓音楽は小学校の総合教育の枠で学習する表現活動の集積として位置づける。

具体的には以下のような活動を順不同にそれぞれの学年に応じた内容で継続的に展開することとなった。

- ① 生活の周りの音に耳を澄まして神島の音を聴く (sound watching)。
- ② 浜辺の漂流物について学習する。
- ③ 島の漁業について学習する。
- ④ 島の人たちの生活 (旅館・海の生き物・飲水等) について学習する。
- ⑤ 「神島の音」について模倣と創造の面から音・音楽作りをする。
- ⑥ 神島の歴史について学ぶ。
- ⑦ 住民や子どもたちの誰もが納得する太鼓の音楽を聴く。
- ⑧ 神島小学校のホームページで活動を紹介する。
- ⑨ 島内の発表に限らず、さまざまな立場の人たちの前で演奏をする機会を大切にする。その都度表現活動の反省と工夫を重ねる。
- ⑩ 声・身体の動きを子供たちから引き出す。

島内ではキラキラ光る瞳で元気の良い子どもたちである。どのような舞台であっても島で遊ぶ時のように、一人ひとりが自信を持って存分に演奏できることが望ましい。校長を始め教職員が一体となって取り組んだ表現活動は、他校との交流学習時に多人数の児童の前でも自信を持って各自

の自己表現ができるようになる等、人前で発表するごとに表現活動を通して臆することなく「わたしたち、ぼくたちは神島小学校の生徒です」という主張をはっきりできる方向に繋がっていった。教師が案じていた〈内弁慶的な島の子ども〉の特質は今では影を潜めてしまった。児童は個々の表現力と自ら学ぶ力、協力して努力をする事の手ぐたえ等を手中に収めたようである。

神島小学校では、表現活動は鑑賞、創造、文化史（歴史）、美的、他教科との関連と応用など、総合教育として学際的な視点で指導計画をたてることと共通認識をした。児童の活動を総合的にまとめる表現手段として“和太鼓”を導入してまとめた（資料、楽譜参照）。

Ⅱ 表現活動を発表することの意義

一般的に、児童の表現活動の学習成果は一度の発表で一応結実する。舞台で児童が一心に役割を果たそうとする姿は祈りにも似て、例え何かのアクシデントがあっても微笑みを誘うものであり、全体的には聴衆は児童から無垢な感動を受けて好評のうちに終わりとなる。そして、教師も児童や保護者も満足感を味わう。しかし、筆者は初めての発表までの取り組みは、児童と教師の試作ではないのかと考える。

試作とは約束事（伝える内容を効果的にする為にはどのように音や声を出し、動き、揃えるか）を守る段階である。初めての発表成果がたとえ如何様な出来栄であって、児童と教師が舞台を作り上げるまでに行きつ戻りつしながら練習をし、知恵を出し合い、苦労を重ねてきた成果は関係者に成し遂げた充実感を与えてくれる。

しかし、約束どおりに恙無く終わったとして、果たして創作する時点での表現活動のねらいは十分伝わったのか、という検討からの次なる出発こそが、教育としての深化ではないだろうか。児童から個々の能力を引き出す出発点として一応の形が整ったのが試作であり、初体験を踏まえながら次への挑戦があってこそ表現活動が教育としてさらに意義深くなる。

伝えたいことをまとめる段階では気づかなかっ

た何かしらの要因に気づくことこそが、児童と教師の発見的な学習であり、上達への始まりである。例えば、舞台袖の手順のこと、舞台でのこと、照明や音響の更なる効果的なアイデア、お客さんとの間合いのこと等は人前で発表する経験から学ぶ事柄であり、発表したことによって教師も児童も遺り残した「何か」、それまで気づかなかった「何か」に気づくのではないだろうか。

児童の表現活動には正解は無く、スポーツのように勝ち負けが無いだけに、活動のねらいを他者へより深く伝えるための内容と表現方法の検討は必要である。教師の工夫や児童一人ひとりの存在が曖昧になることは避けねばならない。

神島小学校の表現活動では、教科で扱う学習内容と重なったり、教科の狭間を補い合うことも重要なねらいとしており、舞台で発表する際の創意工夫や内容を端的にまとめることは全教職員の得意分野からの支援体制によって始まっている。充実度を高める意欲は共通しており、児童の表現力を豊かにすることができるという目標の為に、表現活動の発表とは氷山の一角であると見なしていた。表現活動が長期的な視野で継続的な活動として位置づけられたことによって、1年生から6年生までのそれぞれの児童が成長過程で納得する表現力が培われることが可能になったのである。

児童にとっては、舞台は日々の生活を基盤にした知識・知恵からうまれたハレの場である。全校生徒の交流や衝突からおのずと一定のルールができていった。それは継続することによって前年度からの見様見真似の子ども同士の伝承の成果である。彼らが気づいた事を言える雰囲気は、経験者としての自負心が成せる行為であろう。例えば以下のような事例である。

- ① 気づかなかったり困っている子へは合図して知らせる。
- ② 道具・楽器類は在ったところへ必ず返す。
- ③ 道具・楽器類の扱いは大切にする。
- ④ 誰かの閃きは皆の宝物。
- ⑤ 先生が話す時には音を出さない。
- ⑥ 楽器類のセッティングは率先して自分たちでする。

⑦ 挨拶はハッキリとする。

教師と児童で創りあげ、観客の反応から学び、練習によってまとめ、さらに保護者や地域の人たちの協力を得ることで、神島小学校の表現活動は日々成長し変容を続けている。成長した変容の手応えは児童も教師も捉えており、個々の存在感を主張している。全校児童と教職員の共労からは楽器をより一層上手に演奏することや発声を明確にすることなどの自覚の他に、以下のような事柄の検討があった。

- ① 衣装は法被から大漁旗の利用による衣装へ替え、バンダナも加わった。
- ② 舞台の照明による明暗を利用して、ブラックライトやスライドを利用。
- ③ 楽器の構成では据え置きの太鼓に向かう演奏方法に加えて、かつぎ桶の太鼓奏法を取り入れた。
- ④ 舞台の幕開きでは舞台上からと客席から演奏をしつつ舞台へ上がる。
- ⑤ 舞台の作り物として神島名物の蛸の〈蛸みこし〉を制作。
- ⑥ 食した法螺貝の殻を楽器の〈法螺貝〉にした。
- ⑦ 姉妹校の津市立櫛形小学校から送られた竹で楽器〈竹ブロック〉を作った。
- ⑧ 浜で拾った石と石で〈神島イリイリ〉、石と竹で〈神島トカドン〉、流木で〈流木ブロック〉、漂流物の浮きで〈浮き木魚〉などが加わった。
- ⑨ 演奏時間に合わせて児童が選曲をするところから、「神島音頭」の演奏機会が無くなったように、音楽の嗜好を主張できる。
- ⑩ 鈴の音を取り入れた。
- ⑪ 会場の人も声を出して参加できるように、団扇に文字を書いてお客さんに教えてあげるようにした。
- ⑫ 業者から購入した太鼓演奏の教材ビデオは、学校がめざしている主旨と合わないことを理解した。
- ⑬ 神島は黒潮の流れの中に位置しているということでプレゼントされた、沖縄の太鼓

「パーラン鼓」と「小型の締太鼓」、奄美大島の鼓「チデン」が加わった。

今後もさまざまな試みによる取捨選択が続くであろう。平成12年度の出発から現在まで学校での教育という枠に限った考え方にこだわらず、児童の活動には地域社会との交流の関与を重要としてきた。学校側の柔軟な対応によって、地域社会では児童の活動の理解を深めることができ学校への協力を積極的に申し出ているという自然な成果をあげている。

平成13年度の1年生は保育園児時代に小学生の活動を眺め、発表会では観客として楽しんでいた。小学生になって始めて上級生の練習を見たり仲間に入って一緒に活動をする時、すでに彼らなりの理解で概要を把握していた故に、教師からの説明に新入生としての理解は早かった。例えば「神島小学校の校歌」の伴奏には1年生のアイディアで、太鼓の鉦をパチでなでる音が入っている。このように、児童がそれぞれに進級した時点で彼らに割り当てられた役割の納得が自ずと解っていることは、全体をまとめる教師にはゼロからの出発ではない〈積み重ねの意識と心機一転の意識〉で指導を進めることができるといえよう。児童の変化としては、以下のようなことが挙げられる。

- ① 音に緊張感が出て、欲しい音へのこだわりが感じられるようになった。
- ② 顔の表情が不安・戸惑いから表現内容のイメージの表情へと変わった。
- ③ 合図や挨拶などの声が出るようになった。
- ④ 時折見せた欲求のはけ口のような、他者への不快な行動が見られなくなった。
- ⑤ クラス内では固定のグループ行動が消えた。
- ⑥ 活動の役割分担では、相手の立場を理解して応じる態度が成長した。
- ⑦ 自分たちの活動を喜んでくれる人がいるということが嬉しいようで、張り切っている。
- ⑧ 初めて出会った人が応援してくれることに驚いたようで、演奏が丁寧になった。
- ⑨ 理解できない、行動が伴わない子の為に、曲をアレンジして参加できるような工夫を

する余裕が見られる。

このような子どもの変化は表現活動の到達度を高めることになったと思われる。更なる成長を成し遂げる目標を持つためにも恒常的に発表の場を持つことは望ましいといえよう。

初回から2度、3度と舞台で発表することから児童に判ること、教師に判ることがあった。正解の無い表現活動であるが、反省点を発見する気持ちからはいろいろな方法を工夫したり、問題点を認識して具体的な対処をする作業がおのずとまれることが明らかになった。

神島小学校では児童へ変更の検討・練習で何をどのようにめざしていくのか、具体的に一人ひとりの自覚が進む方向へと指導が進められた。

表現活動の指導では計算や漢字の書き順のような繰り返しが必要な学習と共通して、まず最低限必要な学ぶ内容を押さえることである。そして教職員間の協力体制や連携の良さに加え、地域住民の理解・協力を拠るところが大きかったのである。その結果、児童の学びと一緒に大人たちが学びあう場が生まれ、平成13年度からは神島小学校が島民有志の太鼓の練習場となり、和太鼓演奏が活発に展開している。

Ⅲ 学校と地域との連携

平成12年度からの太鼓指導は太鼓未経験であるが教師歴22年の男性教師が担当し、平成13年度からはさらに大学を卒業して神島小学校へ勤務した太鼓未経験の男性教師が加わった。筆者は太鼓が全く無い学校の教師から「授業に太鼓を導入したい」と希望を聞いた時、このような事例は新しい指導要領に示されている〔和楽器導入〕に沿って今後増えてくるのではないだろうか、と考えた。そこで、一つの実践事例として協力することを約束した。和太鼓導入の先行事例として、三重県立国児学園の生徒たちの太鼓演奏がある。平成6年から太鼓の練習を続け、いまでは演奏依頼の年間約10ステージに出演している。国児学園では当初は三重大学の太鼓クラブの学生たちの指導で、太鼓経験初めての関 頼人先生と生

徒たちの練習が始まった。このような経緯から平成12年度に一度関先生が神島小学校で教師や児童との交流をすることになった。その成果を島の人たちに発表した。神島小学校は自分たちの太鼓が欲しい気持ちが強くなり、小学校長と中学校長、保護者代表、島民代表が組織して「かみしま潮騒太鼓を育てる会（代表：中西智子）」が誕生した。幸運にも日本芸術文化振興会の「芸術団体等活動基盤整備事業助成金」を受けることができたこと、さらに小学校長からの太鼓の寄付があったことで、児童の練習は一層熱意が感じられるようになった。

神島での太鼓情報はビデオ、CD、本、インターネットなどに限られ、指導する教師も含めて県内の太鼓チームの演奏とは別に、プロフェッショナルの【ほんもの】の太鼓音楽を聴いたことが無い。この現状では目指す音・音楽への追求が難しいと判断した筆者は、三重大学客員教授 林 英哲氏へ神島小学校への無償の協力を願い、快諾された。平成13年2月に来島するニュースで中学生の有志が集中的に太鼓練習に取り組むなど、神島では林氏への期待が高まった。

林氏は児童の取り組む姿勢を高く評価した。練習の方向性を指導してもらう場所は公開の場とし、保護者など島民の前での公開講座を了解願った。そして、最後に林氏のソロ演奏を聴いた瞬間、児童は無論、幼い子から大人までが太鼓音楽の繊細さと迫力に魅せられた。演奏で受けた感動は太鼓への興味関心を強くする切っ掛けとなり、大人たちから太鼓を演奏してみたいとの希望が出た。

中学生や大人たちの練習が始まる時点で、児童とは異なり大人へ指導する場合には、「身体が出来上がった人たちの為のメソッドが必要である」ことを伝えた。そして、鳥羽市在住の上野元康氏（南勢町の南勢牛鬼太鼓のメンバー）からバチの持ち方や演奏の構えなどを一度だけ指導願った。大人たちは初めての太鼓経験から、①打てば音が出る ②音符は使用せず言葉でリズムを理解できる ③初体験で太鼓の面白さを体感できる ④全員が初体験である故に一人の疑問や間違いは全員の参考となる、などが理解できた。児童の太鼓仲間が増えた。

太鼓を演奏してみたいという意欲のある児童や大人たちへ教師も共に意欲を持って対応できる裏には、林氏の演奏の感動を自分のものにした手応えがあったからだろう。校長や教職員のさまざまな配慮によって、学校から地域へと定着してきた。太鼓の練習をしない大人たちも含めて林氏のコンサート等、評判の高い演奏会へ行く様子からは今までに無かった島民の音楽への積極的な動きがみられる。太鼓指導の教師たちは県外の上質な演奏グループとの交流が始まり、音・音楽への真摯な挑戦が始まっている。

おわりに

今では夜になると小学校の音楽室で中学生チーム、女性チーム、保育園児を含む男性チームの練習が続いている（学校は南斜面にあり、集落は北斜面なので、集落への音公害の心配は無い）。指導は小学校の教師2名である。

このような活動へと展開した土壌は、島民が日常的に子どもたちのパーソナリティーを見分ける付き合いをしていたことが遠因であったと思われる。総論としていえることは、神島小学校は太鼓演奏を目指しているのではなく、子どもたちの身の丈に合った表現活動への努力をしながら結果的に太鼓演奏が徐々に上達したということであろう。

離島という条件での人的環境と自然的環境、社会構造がこのような教育の風土を支え、維持させる力になっていると指摘できよう。そして、保護者の30代から40代の大人の理解と応援、祖父母世代の理解と応援、小学生に誘発された中学生たちの意気込みなど、それぞれが主体性を持って相互に作用しながら小学校の実践を支えていると考える。

児童は敬老会の催し、鳥羽市内小学校の連合音楽発表会、みえ県民文化祭、成人式などの舞台演奏を引き受けている。神島小学校の独自性のある表現活動は注目されて島から授業参観に訪れる人がいる。地域の老人から太鼓を寄付されるなど、大人たちからは児童の表現活動への理解が深まり支援体制が充実して恵まれた教育環境である。

全ての条件が児童の内発的な表現へと彼らの衝動を引き出す要因であった。児童が持続的に表現活動へ意欲を持ち続けるには、関連するそれぞれの教科から学んだことが活かされている実感を得ることである。合わせて、児童一人ひとりに自信を持たせるような導きである。その為には個々のパーソナリティーを活かしながら、個人の努力によって全体がまとまるという自覚を年齢に応じ理解できる導きが必要といえよう。

神島小学校は平成12年度・13年度に「総合的な学習の時間」を「島っ子タイム」として『地域と情報教育（2時間）』『表現と交流（1時間）』を週3時間設定した。その中で、地域の特色を活かした表現活動は国際理解教育、情報教育、環境教育とも関連しながら新しい教材作りから始まった。表現活動が円滑に継続できる要因として以下のことが考えられる。

- ・学校での学習と学校外での生活の関係を重視し、地域との接続点として和太鼓に注目した。
- ・一人ひとりの児童に応じた学習が可能である和太鼓の取り組みは、小学校教育に限らず、幼児、児童、生徒の主体的な個性を生かした自己実現を可能にした。
- ・「学校の授業」としての枠の発想だけでなく、「生活の場」という発想で大人たちの生涯学習活動へ柔軟に連動した。

以上の要因は、学校文化の独自性から派生して地域文化の独自性を創造することに繋がった。

平成14年度の新入生は1名で、全校生徒が20名になる。学校は卒業・入学によって児童の構成は変化するが、学校側は20名の生活暦・学習暦を基盤としながら彼らの思いを育み、それらを具現化する表現活動の展開を計画している。

学級という児童の人間関係や学年の枠組からでた教師間の協力は、一人の児童を複数の教師の視点で見つめることができるという教育効果を活かすことができた。本稿の事例では幸運にも、林英哲氏というプロフェッショナルの協力を得て子どもたちの自己実現に大きな役割を果たした。教科指導の領域が拡大する今日、存在感のある専門の技術力を持つ人からの直接的な支援体制は必要であろうと考える。

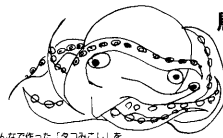


潮騒に遊ぶ！音のビッグウェーブ

鳥羽市立神島小学校児童

～ストーリー～

大きなマグロに追われてスイミーがやってきたところは鳥羽の神島のお海だった。スイミーが初めて知る神島。…さて、元気をとりもどせるか。



ほら貝のおさしあひって
とってもおいしい！です。
ほら貝ってとても黒く
音が出ます



みんなで作った「タコみこし」を
1年生と2年生で動かします

神島に聞こえる音 そして島の音は…

「潮騒に 伊良湖の島辺こぐ舟に 妹乗るらむか 荒き島みを」という句は万葉集の中で柿本人麻呂が詠んだもの。この句をモチーフにして、声が広がり、鳥のさえずりや潮騒の音が勢いよく作り、和太鼓を加え一気に大きなうねりとなっていく。

そして、聞こえてくる音は伊良湖沖を行く船の汽笛の音。ほら貝を合図にしたこつぽ太鼓の音が波を奏で、やがて風の音・波の音・船の音が重なりだす。波は時としてやさしく、そして厳しい。



神島の海の生き物たち

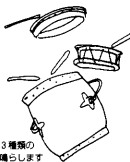
島の周りの海には、美しい自然の中でたくさんの生き物もくらしている。海のおぶくの音にのって、いったい、いくつの魚や貝や海藻が出てくるんだらう。ブラックライトに浮かびあがる。海の中のおしゃべり。不思議な世界です。

浜辺で集めた貝で作った
すずしい音の出る楽器です



神島といえばタコなんだ

3・4・5年生がたこつぽでリズム打ちで遊んでいると大きなタコが音に引かれるようにやってきた。校長先生を真中にした1・2年生のタコみこしだ。おやおや、真っ赤なタコも踊り出したぞ…



沖線の3種類の
太鼓を鳴らします



ドキドキします。
おうんしてておさい。
しんあけ



はいやん おんねは
じょうきだま。もうこ



各学年で自分たちで曲を作っては振り付けもつけました。

そんな時突然、林英哲さんが島にやって来るというお話をいただきました。また、太鼓をお借りしてなんとか格好をつけた程度なのに、英哲さんは、みんなの作った曲を真剣に聞いてくださり「こうしたら大きな音が出て、かっこよく打てること」を見せてくれました。

これからも島のことを学び、私たちしかできないものを作っていくと思います。

 天野 圭		 小久保昌哉		 藤原 綾祐		 高木 建幸		 小久保華美		 小久保誠也	
 天野 伸亮		 小久保佳苗		 天野 優奈		 小久保佳歩		 小久保知美		 藤原 衣鈴	
 小久保明子		 天野 伸亮		 小久保文久		 小久保来里		 高木 理会		 寺田 和輝	
 天野 麻		 小久保文久		 小久保来里		 小久保成将		 小久保里沙		 小久保真入	
 天野 麻		 小久保文久		 小久保来里		 小久保成将		 小久保里沙		 小久保真入	

【支援・協力】神島小学校教職員と保護者

資料1 神島小学校 第6回目の発表プログラム

2001年8月5日(日)「みえ県民文化祭 子どもフェスティバル」

会場 三重県立総合文化センター中ホール

楽譜 1 柿本人麻呂の歌（※）を児童が歌った楽譜（採譜：服部あぐる）

（※）「潮騒に 伊良湖の島辺こぐ舟に 妹乗るらむか 荒き島みを」

No.1

Handwritten musical score for No.1. The score consists of six staves. The first five staves are vocal lines with lyrics in hiragana. The lyrics are: しお - さい - に - - / いら - この - け - ん - - / こぐ - 3. ね - に - - / いも - のる - らむ - や - - / あら - き - - / しお ね - -. The sixth staff is a guitar accompaniment line with a treble clef and a key signature of one flat. It contains a series of chords and single notes, with some notes marked with 'x'.

No.2

Handwritten musical score for No.2. The score consists of six staves. The first five staves are vocal lines with lyrics in hiragana. The lyrics are: しお - さい - に - - / いら - この - け - ん - - / こぐ - 3. ね - に - - / いも - のる - らむ - や - - / あら - き - - / しお ね - -. The sixth staff is a guitar accompaniment line with a treble clef and a key signature of one flat. It contains a series of chords and single notes, with some notes marked with 'x'.

No.3

Handwritten musical score for No.3. The score consists of five systems, each with a vocal line (treble clef) and a guitar accompaniment (treble clef). The lyrics are written below the vocal line. The first system has the lyrics "あら-き -". The second system has the lyrics "しき-おき -". The third system has the lyrics "しお - せい - に". The fourth system has the lyrics "しき-せい - に". The fifth system has the lyrics "しき-せい - に".

No.4

Handwritten musical score for No.4. The score consists of five systems, each with a vocal line (treble clef) and a guitar accompaniment (treble clef). The lyrics are written below the vocal line. The first system has the lyrics "しき-せい - に". The second system has the lyrics "しき-せい - に". The third system has the lyrics "しき-せい - に". The fourth system has the lyrics "しき-せい - に". The fifth system has the lyrics "しき-せい - に".

No.5

